



はっちょうじま こくおさめ 69 八丁島の御供納

種 別：無形民俗文化財（昭和 60 年 6 月 26 日 市指定）

所 在 地：久留米市宮ノ陣町八丁島（天満神社他）

アクセス：西鉄電車甘木線古賀茶屋駅下車 徒歩 8 分

地元の皆さんが保存している民俗行事が久留米にはいくつかありますが、これもその一つです。

由来については明らかではありませんが、旧霜月 15 日に行われてきた「収穫祭」と地元に残る「おかねの恩返し」・「菊姫物語」の伝説にまつわる魔払いの行事が一緒になったものと思われます。

この地区には、大きな堀や沼等が数多くあり、その中に八丁ほどの島があり、その島を八丁島と呼びました。この島の一隅に天神堀という堀があります。その中の島に楠の大樹があって、堀には大蛇が住み、人々は毎年子供を人身御供として差し出し、災難を逃れたということです。

現在の行事は、昔の人身御供の行事をそのままに、子供の無病息災を願って、地元の皆さんの手により、毎年 12 月中旬の 2 日間にわたり行われています。



みやのじん しょうぐんばい
70 宮ノ陣の将軍梅

種 別：天然記念物（昭和 63 年 2 月 24 日 市指定）

所在地：久留米市宮ノ陣町 5 丁目 12 番 1 号 宮ノ陣神社

アクセス：西鉄電車「宮ノ陣」駅下車 徒歩 5 分

しょうへい
正平 14 年 (1359)8 月に、後醍醐天皇の皇子である征西将軍かねなが懐良親王が、菊池武光、草野永幸ら宮方の軍勢を率い、南下してきた少弐頼尚の率いる足利方の大軍と筑後大保原おおほぼる（現在の小郡市）で激しい戦いをくりひろげました。これが南北朝期の戦史に残る激戦で有名な「大保原の合戦」です。

その際に、懐良親王がこの地に陣を張ったことが、「宮ノ陣」の地名の由来になったともいわれています。宮ノ陣神社の境内に残る将軍梅は、この時に戦勝を祈って親王自らが手植えたという伝説を持ちます。

それ以来、600 年以上もの長い年月を経て、老木から芽生えた若木へ連続と命をつないできた将軍梅は、地元の人達によって大切に守られてきました。

現在も毎年 2 月下旬頃から遅咲きの花を咲かせ、訪れる人々に歴史を語りかけてきます。境内は梅の里として、梅林寺の外苑とともに久留米の春の名所となっています。





せきぞうしょうめんこんごうぞう
71 石造 青面金剛像

種 別：有形民俗文化財（昭和37年2月20日県指定）

所在地：久留米市城南町4-2 日吉神社

アクセス：JR久留米駅下車 東へ徒歩2分

凝灰岩の塔身に花頭窓形の縁を作り、中央に邪鬼を踏みつける青面金剛像と脇侍二童子が陽刻されています。また、台座にも同様な手法で3匹の猿と2羽の鶏が刻まれています。この像は中国の道教の影響をうけた庚申信仰の所産で、各地で庚申塔と呼ばれているものの一つです。

本像は元文^{げんぶん}5年(1740)の造立で、藩主の信仰も厚かった洗切^{あらいきり}の山王宮にあったものです。寄進者は久留米藩の御船手(水軍)の人々です。昭和4年(1929)に日本ゴム株式会社が拡張した際、洗切一帯が買収され、山王宮も移転し、この塔も現在地に移ってきました。

庚申信仰と結びついた真言密教の夜叉像^{やしや}である青面金剛像は洗切で行われた庚申待の象徴で、庚申の日には夜を通して信仰されたものです。

庚申塔として県下の代表的作例であり、民俗例を具体的に示すものとして貴重な遺品です。



72 久留米城跡

種 別：史跡（昭和 58 年 3 月 19 日 県指定）

所 在 地：久留米市篠山町 444 他 篠山神社

アクセス：西鉄バス「大学病院前」下車徒歩 2 分

筑後川沿いの小高い山に築かれ、北と西には筑後川、東には広い湿地帯がひろがる天然の要害の地に築かれています。

戦国末期には、高良山勢力の出城で座主良寛の弟麟圭が居城としていました。天正 15 年 (1587) 毛利秀包が入城、関ヶ原の戦い後は柳川城主田中吉政の支城となりました。元和 7 年 (1621) に有馬豊氏が入城し、従来の東面の城構えを南面に替え、本丸・二の丸、三の丸、外郭と南に拡張しました。

天守閣はなく 7 つの隅櫓とこれを結ぶ白壁の多間長屋が城壁を巡ってました。明治 6 年 (1873) に廃城とともに解体され、現在は当時の石垣・内濠・井戸などが保存され、御殿跡・櫓跡などの遺構も観察できます。往時の久留米城の構造などを知りうる貴重な史跡です。



73 日輪寺古墳 にちりんじこふん

種 別：史跡（大正 11 年 3 月 8 日 国指定）

所 在 地：久留米市京町 279 日輪寺

アクセス：J R 久留米駅下車徒歩 5 分

一見円墳かと思われる墳丘を残していますが、全長約 50 m の前方後円墳です。後円部に造られた横穴式石室は、発掘された明治 45 年 (1912) にはほとんど壊されていて、げんしつ玄室の一部を残しているだけでした。

玄室は正方形に近く、壁面はあんざんがん安山岩の板石を平積みになっています。また、高さ約 50cm のあそぎょうかいがん阿蘇凝灰岩で造ったせきしょう石障があり、かぎのてもん鍵手文とどうしんえんもん同心円文が交互にせんこく線刻されています。その上には赤で彩色されていて、現在でもわずかながら見ることができます。玄室内に石障をもつ古墳は、久留米市内には藤山町の甲塚古墳があります。

副葬品としては、仿製の四獣鏡、玉類、じかん耳環、はじき刀、すえき土師器、須恵器や石枕が出土しています。これらの遺物や装飾文様などから、5 世紀後半から 6 世紀初頭に造られたと考えられます。



坂本繁二郎生家復原予想図

74 坂本繁二郎生家

種 別：有形文化財 建造物（平成 15 年 7 月 28 日 市指定）

所 在 地：久留米市京町 2 2 4

アクセス：J R 久留米駅下車徒歩 10 分

坂本繁二郎生家は侍小路の「京隈小路」の一角にあり、久留米城下に残る唯一の武家屋敷です。坂本家は摂津国（現大阪府）の出身で、慶長 6 年（1601）に筑後の大名となった田中吉政とともに三河国（現愛知県）から下ってきました。田中家断絶後、浪人しますが、正保 2 年（1645）に、有馬家から半兵衛義政が 150 石の御馬廻組（中下級武士）に召し抱えられ、幕末まで続きます。屋敷地の拝領時期は不明ですが、延宝 8 年（1680）、天保時代（1830～44）の城下図では現在地に描かれています。

建物は規模が大きく、延床面積は約 77 坪です。「座敷、次の間」等の接客空間と「茶の間、台所」といった居住空間が分かれた武家屋敷の構造をよく残しています。建築年代は、江戸時代後期と推測されています。

坂本繁二郎は、近代洋画の巨匠の一人で、この建物で生誕から青年期まで過ごしました。また、同時代の画家であり、坂本繁二郎の友人である青木繁が一時滞在しており、二人が描いたといわれる襖絵も残されています。

生家は明治 42 年（1909）に、同じく京隈の武家であった山田家の所有となり、その後市へ寄贈されるまで、大切に維持されてきました。



75 ^{きゅうみしまけながやもん} 旧三島家長屋門

種 別：有形文化財 建造物（平成 13 年 7 月 23 日 市指定）

所 在 地：久留米市篠山町 270 篠山小学校

アクセス：西鉄バス「篠山 3 丁目」下車徒歩 3 分

久留米城内の外郭にあった 300 石の知行をもつ梶村家によって建設された長屋門です。明治 30 年頃に建物が三島家によって受け継がれ、平成 13 年 5 月に久留米市に寄贈されるまで同家によって管理されてきたことから、旧三島家長屋門と呼んでいます。

木造一層、入母屋造、^{いりもや}棧瓦葺の長屋門で、桁行 6 間・梁行 2 間の規模を持ち、門の両側に部屋があります。

建築年代は不明でしたが、今回の解体移築の過程で墨書が見つかり、^{てん}天保 11 年 (1840) の建立で、棟梁は藩の御手大工である三牧市左衛門であることもわかりました。

平成 13 年度事業で、通町の三島家の敷地から現在地へ移築復元されました。久留米城下町に残る武家屋敷の家構の一つであり、江戸時代の久留米を語る貴重な建造物です。

76 梅林寺の文化財

所在地：久留米市京町 209

アクセス：JR 久留米駅から徒歩 5 分

江南山梅林寺は、元和 7 年 (1621) 年に初代久留米藩主有馬豊氏が丹波福知山の端巖寺を移建した臨濟宗妙心寺派の名刹で、有馬氏の菩提寺であり、九州の代表的な修行道場としても知られています。

延享元年 (1744) 2 月、頼僮に招かれた古月禪師が福聚寺の堂宇が竣工するまでの 2 年間を梅林寺で過ごしたこともあります。

昭和 33 年 (1958) には開山 350 年を記念して、外苑が作られ、梅林の名にふさわしい梅の名所となっています。

76-1 木造薬師如来坐像

種別：有形文化財 彫刻 (平成 7 年 4 月 24 日市指定)

梅林寺に祀られている仏像彫刻としては、最も古い銘を持つもので、膝前裏の墨書銘から正和 4 年 (1315) 以前に阿弥陀如来像として作られたことが記されています。

もくぞうによい りんかんのん ざ ぞう
76-2 木造如意輪観音坐像

種 別：有形文化財 彫刻（平成 7 年 4 月 24 日 市指定）

梅林寺の仏像の中で 2 番目に古い銘を持つもので、建徳 2 年(1371)9 月に熊本県八代郡の光福寺の本尊として作られたと考えられます。また、九州に伝存する如意輪観音坐像の在銘作例としては、最も古いものの一つです。高さ 69.1cm

もくぞうによらいけい ざ ぞう
76-3 木造如来形坐像

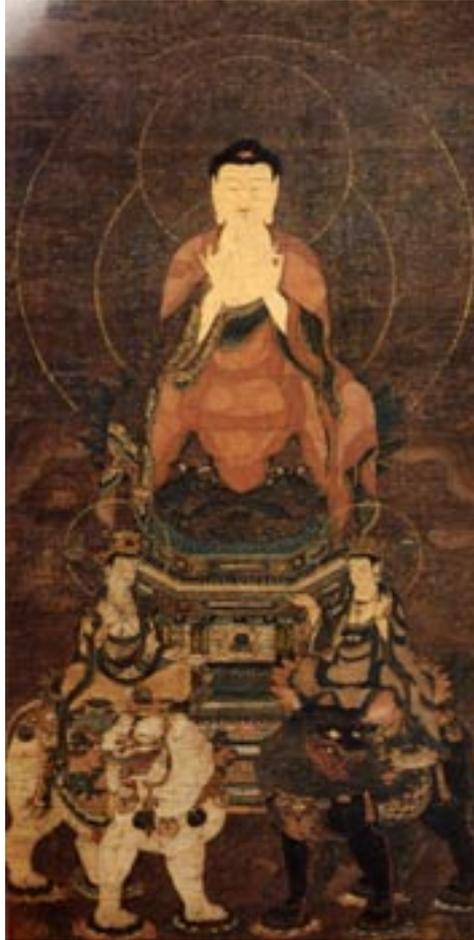
種 別：有形文化財 彫刻（平成 7 年 4 月 24 日 市指定）

梅林寺第 15 世猷禅玄達が晩年に居住した奥室に祀られたもので、像底の墨書銘から天文 21 年(1552)10 月に永平寺の起雲により造立され、第 4 世の方室玄杲の時代に移ってきたことがわかります。高さ 25.8 cm

けんぼんちゃくしょくようりゅうかんのんず
76-4 絹本著色楊柳観音図

種別：有形文化財 絵画（平成7年4月24日市指定）

「人々の病難を除く」、と説かれる楊柳観音は、中国宋時代以後、盛んに描かれ、我が国でも禅宗が伝わってから広く描かれるようになりました。通常、水波の中の巖上にくつろいで座る姿で表されています。梅林寺の楊柳観音図は、宣徳2年（1427：応永^{おうえい}34年）に朝鮮半島で製作されたもので、観音が海中の岩座に右斜めを向いて半跏に座し、その下方に善財童子や観音を拝する3人の女性像を加えるなど、京都大徳寺の高麗時代の楊柳観音像に似ていますが、高麗仏画の強い影響のもとに李朝時代初期に描かれたものようです。



けんぼんちゃくしよくしゃ かさんぞんぞう
76-5 絹本 著色 釈迦三尊像

種別：重要文化財 絵画（大正元年9月3日国指定）

この釈迦三尊像には、胸前で転法輪印を結んで八角の台座に座った釈迦如来を中心に、右に獅子に乗った文殊菩薩、左に象に乗った普賢菩薩が描かれています。三尊の細い指先の表現やこまかく綿密な文様線など中国・宋時代の仏画の影響が随所に見られるのが特徴で、鎌倉時代の宋風画的要素を示す好例として注目されます。



せきぞうほうきょういんと
77 石造宝篋印塔

種 別：有形民俗文化財（昭和37年7月26日県指定）

所 在 地：久留米市京町212 法泉寺

ア ク セ ス：JR 久留米駅下車徒歩5分

この塔は文化12年(1815)に天台僧豪潮ごうちょう律師が観音講衆と共に建立したものです。豪潮は享和2年(1802)有名な呉越王錢弘俶の阿育王故事あしよかおうに習って、八万四千塔宝篋印塔建立の誓願をたて、天保6年(1835)美濃国(岐阜県)で没するまで造塔を続けています。自記によれば文政元年(1818)までに二千余基を建立したといわれています。

銘文から「宝篋だらに羅尼銅刊」一卷、「大乘妙典一石一字經」一部を納めたことが分かりますが、昭和49年(1974)の解体修理の時、「文化十一甲戌(1814)春豪潮記」の奥書がある銅板2枚と経石が見つかっています。



78-1 庚申板碑

種別：有形民俗文化財（昭和59年6月29日市指定）

所在地：久留米市長門石5丁目1-13 八幡神社・天満宮

アクセス：西鉄バス「長門石」下車徒歩3分

庚申信仰は、60日に一回めぐってくる庚申の夜、^{さんしのむし}三尸虫が人の体から抜け出して、その人の罪を天帝に告げるのを防ぐため、人々が集まり徹夜で雑談する風習にあるといわれています。この風習に基づいて作られたのがこの庚申塔です。

高さ73cm、幅75cmで、全体的に丸みをおびた自然石で、碑面中央に^{しゅし}種子と「奉信念庚申待三十五年」、その右に「寛永十一年甲戌十一月吉日執行次郎衛門尉敬白」とあります。なお、「右意趣者子孫繁栄家内福貴村中安全祈願成就如意満足之所」からなる趣旨文が刻まれ、当時の庚申信仰の内容を知る上に貴重なものです。

寛永11年(1634)建立は県下でも最古の遺物であり、「三十五年」は当時から35年前の^{けいちよう}慶長4年(1599)には「庚申待ち」行事が行われたことを示すものです。



78-2 ^{いかりいし}碇石

種 別：有形民俗文化財（昭和 62 年 2 月 21 日 市指定）

所 在 地：久留米市長門石 5 丁目 1-13 八幡神社・天満宮

アクセス：西鉄バス「長門石」下車徒歩 3 分

碇石は、長門石の八幡神社に土中に突き立てられた形で建っています。赤御影（^{みかげ}花崗岩）で造られていて、全体の四分の一程が欠けています。

碇石とは、角柱形の石材を碇として使用したもので、平安時代に来航した中国北宋時代の商船や日本の遣唐使船、鎌倉時代の蒙古来襲の軍船など色々な時代の様々な船に使われました。

蒙古碇石は、西日本一帯に 40 数カ所発見されています。その中心は博多湾沿岸で、西は平戸・五島、東は山口県萩で確認されています。もし、この碇石が蒙古来襲時の軍船のものとするれば、最も内陸部で南にある碇石ということになります。

またその一方で、地元の伝承や記録にある長門国（山口県）の船との関連や長門石地域は筑後川がつくった洲であることから、有明海交通の面から考えることもできます。

付图 9





かまぐち こふん
79 釜口古墳

種 別：史跡（昭和 53 年 6 月 24 日 市指定）

所 在 地：久留米市高良内町 4030-1

アクセス：堀川バス「柳ノ瀬」下車徒歩 5 分

昭和 40 年 (1965)、斎場構内の整備中に発見された古墳で、直径約 10 m の円墳です。須恵器の甕、提瓶や鉄鍬が出土したことから、古墳時代の後期、6 世紀後半から 7 世紀初頭に造られたと考えられます。近くには、古墳時代後期の群集墳である「ひょうたん山古墳群」や高牟礼中学校建設に伴って調査された「西行古墳群」などもあります。



浦山古墳石棺



石棺内部の装飾

80 浦山古墳

うらやま こふん

種 別：史跡（昭和 26 年 6 月 9 日 国指定）

所 在 地：久留米市上津町 1386

アクセス：西鉄バス「上津町」下車徒歩 3 分

成田山の敷地内にある浦山古墳は、前方部の短い全長約 60 m の帆立貝式前方後円墳です。墳丘は自然の丘陵を利用して造られ、後円部に横穴式石室があって、内部に妻入横口式の家形石棺が納められています。

家形石棺の屋根には 4 個の環状縄掛突起があり、入口にはめ込み扉とそれを押さえる門を持った精巧な構造をしています。石棺の内部には一面に赤色で彩色され、線刻された装飾文様を見ることができます。

遺物についてはよくわかっていませんが、勾玉、金環、刀剣、甲冑が出土したと伝わり、日輪寺古墳よりやや古く、5 世紀後半頃に造られたと考えられています。

81 極楽寺古墳群

種 別：史跡（昭和 53 年 6 月 24 日 市指定）

所 在 地：久留米市上津町 2125 ほか

アクセス：西鉄バス「野伏間」又は「上津荒木」下車後、

県道藤田日吉町線を南へ 20 分

この古墳群は、上津荒木川と野添川にはさまれた、通称高良台丘陵にあり、正確な数は確認されていませんが、小古墳が点在しています。調査されたのは 3 基で、このうちの 2 基が指定され保存されました。

共に径 20 m 前後の円墳で、石室は複室の横穴式石室です。1 号墳からは装身具（ガラス小玉・耳環）、変形文鏡が出土しました。





82 筑後国分寺跡（講堂・塔及び回廊跡）

種 別：史跡（昭和 56 年 6 月 1 日 市指定）

所 在 地：久留米市国分町 711-1 日吉神社

アクセス：西鉄バス「国分」下車徒歩 1 分

国分寺は、奈良時代の天平^{てんびょう} 13 年 (741) に聖武天皇の勅命で国ごとに建立され、鎮護国家・教育・文化の中心となっていました。

筑後国分寺は、国分町の日吉神社境内を中心に僧寺、その北約 200m の「字西村^{あざ}」地区に尼寺が推定されます。僧寺は、市街化が著しくそのほとんどがなくなっていますが、神社境内に講堂の礎石が 1 個残されています。講堂は、東西柱間 7 間 (約 29m)、南北柱間 4 間 (約 13m) の規模を持つ建物規模が推定されます。また、道路を挟んだ南側の釈迦堂が一段高くなっており、一辺約 9m の建物規模を推測する塔基壇の一部が発見されています。さらに周囲から築地塀^{つじべい} (土塀) の溝跡が発見され、正方形の寺域ではなく不整四角形が推定されます。国分寺跡から出土する古瓦は、5 種類の軒丸瓦、3 種類の軒平瓦や道具瓦などがあります。

国分寺は、10 世紀以後、律令社会の変貌・衰退とともに、国家の保護を失って衰えますが、筑後国分寺も例外ではなかったようです。現在、筑後川河畔の宮ノ陣町にある、護国山国分寺は中世に建てられたものです。



はちまんじんじゃはいでん みょうじょういんほんどう
83 八幡神社拝殿 (伝 明 静 院 本 堂)

だいせいかん ぎ てんじょう や とう 一対
 付 大聖歡喜天常夜灯
 はちまんじんじゃさいげんむなふだ 二枚
 八幡神社再建棟札

種 別：有形文化財 建造物 (昭和 57 年 5 月 25 日 市指定)

所 在 地：久留米市安武町安武本 637

アクセス：西鉄バス「安武学校前」下車徒歩 10 分

西鉄電車 安武駅又は西鉄バス「安武」下車徒歩 20 分

この建物は、明治初期の神仏分離によって廃寺となった高良山^{みょうじょう}明 静 院の本堂を、明治 3 年 (1870) に当地へ移築したといわれています。

箱棟には、天台宗の寺院によく見られる「輪宝紋」をつけ、東側に龍、西側に麒麟^{きりん}が力強く表現され、上部両端に置かれた大きな鯨^{しやち}と共に、建物の重厚さを際立てています。

また、内部の格天井^{ごうてんじょう}には、有馬藩の御用絵師三谷主郷が中心となって描いた、154 枚の墨絵や彩色画を見ることができます。

これまでに部分的な修理はされましたが、江戸時代における高良山寺院の盛大さを知ることができる唯一の遺構として、貴重なものです。



ひ ぜんしまさかいし
84 肥前嶋境石

種 別：有形民俗文化財（昭和 62 年 2 月 21 日 市指定）

所 在 地：久留米市安武町武島 個人蔵

一般に肥前と筑後の境界は、筑後川の中心で決められてきました。しかし、安武町武島の大島部落の北東方部では、洪水のため本流が移動し、その結果肥前領の一部が筑後側に取り残されてしまいました。肥前側では、その所有権を明らかにするために、この領地に「肥前嶋」と名前をつけ、石柱を南面して 2 個建て、境界を明らかにしました。

これらは、大正期の洪水後の堤防工事の際に撤去されてしまいました。現在残っている境石はその内の 1 つで、「肥前嶋境石」と銘が記され、大きさは高さ約 170cm、幅・奥行きとも約 30cm になります。なお、もう一方は行方不明です。

肥前嶋境石は、境界を示す印として郷土の歴史を見守ってきました。



め やすまち いち り づか
85 目安町の一里塚

種 別：史跡天然記念物（昭和49年4月25日市指定）

所 在 地：久留米市安武町安武本3104-1

アクセス：西鉄バス「目安町」下車徒歩1分

一里塚の起源については、明らかではありませんが、豊臣秀吉の頃に36町を1里として、1里ごとに塚を築いていたようです。その後江戸時代になり、国内統一とともに道路網の整備が進み、街道に約5間(9m)四方の小山状の一里塚が築かれました。一里塚は、塚上に1本または数本の木が植えられ、旅人にとっては旅程の目安として、また木陰が休憩の場として貴重なものでありました。

目安町の一里塚は、築造の時期は不明ですが、^{げんろく}元禄年間(1688～1704)の「久留米藩領図」には久留米と柳川を結ぶ^{おうかん}往還に描かれていることから、それ以前にはあったと思われます。久留米^{ふだのつじ}札ノ辻(今の通町、市役所東交差点付近)からちょうど1里となります。古くは、この西側の榎の塚とともに、東側にも松が植えられた塚がありましたが、道路の拡幅により壊されたようです。

久留米市内には、その他に各所に一里塚がありましたが、現在は残っていません。



86 野瀬塚遺跡

種 別：史跡（平成2年3月27日市指定）

所在地：久留米市安武町安武本野瀬塚

アクセス：西鉄バス「目安町」下車徒歩10分

遺跡は、筑後川と耳納連山からの小河川で開析する沖積台地上^{ちゅうせき}にあり、安武町安武本に位置し、縄文時代と奈良・平安時代の複合遺跡です。

縄文時代は、狩猟用の落とし穴土坑が20基ほど発見されました。奈良～平安時代の遺跡の主な遺構は、8世紀中頃～9世紀中頃にわたる掘立柱建物^{ほったてほしらたて}・井戸・廃棄土坑^{どこう}・溝などです。特に、48棟に及ぶ掘立柱建物群は、建物の計画方位・配置状況から4時期に分類できます。

出土品は、土師器^{はじ}・須恵器^{すえ}がほとんどで、ほかに施釉陶器^{せゆうとうき}・陶器・製塩土器^{とすい}・鉄錘^{てつぞく}・鉄鎌^{てつせん}・刀子^{とうす}・鞆羽口^{ふいご}など特殊遺物も発見されています。また土師器・須恵器には「三万大領^{みつまたいりょう}」など郡の役人の階層を表す文字や、「田主」など名前と思われる文字を書いたものが見られます。

この地は、古代の三潯郡にあり、さらに田家郷（安武）に位置するものと考えられます。郡の役所である郡衙跡^{ぐんが}はまだわかりませんが、郡衙関連の施設と思われる。